雪の原に突き出ていた棒杭に馬をつないだまま雪の上に寝転んだ。目が覚めてみると、真昼間。馬はどこを探しても見当たらない。頭上からいななきが聞こえたので、見上げると、教会の塔のてっぺんに据えられた風見鶏につながれた馬がぶらさがっている。一計を案じた小生は、拳銃を構えて、馬の手綱をめがけて、ずどんと一発。運よく馬を取りもどすことができた。

数十羽の野ガモがてんでんばらばらに泳いでいた。全部を一発の銃弾で仕留めるのはとても無理。思い付いたのは狩猟カバンに入れていたベーコンを紐でつないで投げてやると、まず一羽がパクリ。脂でつるつるしたベーコンが、そいつのお尻から出てきたところを、別の野ガモがまたパクリ。ついには数十羽の野ガモ全部が一列につながった。野ガモはみんな生きていて、小生もろとも空に舞いあがったのだ。

ある日、弾をすべて撃ち尽くしたとき、りっぱなシカが現れた。小生はすかさず銃に火薬を詰め、チェリーの種を装填しずどんとやったが、シカは逃げ去った。それから一、二年した頃、同じ森で狩りをしていると、またあのシカに出会った。そのシカときたら、角のあいだに桜の木を生やしていた。こんどは一発で撃ち倒し、シカ肉とチェリーをいただきました。

ある時、ロシアの森で、美しい黒ギツネに出くわした。貴重な毛皮を銃弾で穴をあけてはもったいない。銃身から銃弾を引き出し、代わりに板釘を装填して発砲すると、見事命中。尻尾が幹に釘付けになった。

そこで、鞭をふるうと、キツネはたまらず、美しい毛皮からするりと抜けたので、後には傷のない毛皮だけが残ったとう次第。

ある時、沼を飛び越えようとしたが、思ったよりも大きな沼で、飛んでいる途中で無理だと分かった。そこで空中で馬をぐるっと回転させて、元の岸に戻った。もっとしっかりと助走し手、今度はと思ったが、対岸を目の前にしてどぼん。そこで、後ろで結んでいた髪をえいっと持ち上げ、膝ではさんだ愛馬もろとも豪腕で引っ張り上げて、無事難を逃れた。

ある時、要塞都市を攻撃していたわが軍の将軍は、都市の内部の情報を知りたがっていた。そこで、小生、要塞めがけて発射された砲弾にひらりと飛び乗り、空中から偵察した。さて、どうやったら味方の陣に戻れるか。そこへ、敵の要塞から味方の包囲軍めがけて発射された砲弾が飛んで来たので、空中でひらりと飛び移り、味方の陣地に無事帰り着くことができた。

ロシア軍に属していた小生は、俊足の馬に乗ってトルコ軍を追撃していた。ふと周りを見ると、敵の姿も味方の姿も見当たらなかったので、広場の泉で馬に水を飲ませることにした。愛馬はいくらでも飲んで、止むことがない。小生が敗走する敵と一丸となって要塞に飛び込んだ時、城門の落とし格子が突然落とされ、馬の後半身を切断してしまっていたのだ。

ヨーロッパ全土が異常にきびしい冬に見舞われた年のこと。小生は二頭立ての郵便馬車に走らせていました。狭い道でしたので、向こうから来る馬車と鉢合わせをしたら困ると思い。御者に角笛を吹くようにと忠告しました。御者は角笛を思いっ切り吹きましたが、うんともすんともいいません。ようやく宿場にたどり着いて宿を取り、暖を取ることができました。御者はかまどの側に打った釘に角笛をかけ、一息いれました。

突然、プー、プー、プップカプー！　ふたりとも目を丸くしましたが、やがて訳が上分かりました。さっきいくら吹いても鳴らなかった音が、角笛の中で凍結していて、それが今になって溶けだしたのです。

◆説明文は、ビュルガー作、酒寄進一訳『ほら吹き男爵の冒険』（光文社古典新訳文庫、2020 年）より抜粋。